園長先生の子育てひろば

令和3年9月

魔法

園長 山中 文

子どもが小さい時、降園途中の信号の前で、こう言われたことがあります。

ねえママ、見てて、魔法をかけるから。ぼくが「青になれ」っていうと、信号はちゃんと青になるんだよ。

「青になれ!……ほらね!」

そりゃそうだろうとおかしさを噛み殺して、「そうだね、いい魔法だね!」と言いながら横断 歩道を渡ったことでした。

幼児期は、その特性として「自己中心性」がみられる時期です。

この場合の「自己中心性」とは、自分の利益ばかりを考えて相手のことを考えないといった、いわゆる利己的な様子のことではありません。就学前の子どもたちが、自分と他者との区別がまだ明確でないため、自分の気持ちで他者や他の事物をとらえてしまうといった特性を指しています。この頃の子どもたちにとっては、生物も無生物も同じように見たり聞いたり考えたりしているようですね。

そういう世界にいますから、この信号のようなエピソードは幼児期にたくさん出てきます。先の子どもは、もっと小さい時には、絵本雑誌の中のくまさんに、「帰っちゃんたんだねえ」とつぶやいたり、「いないいないばあ」をしてみせたりしていました(このお話は 2020 年 8 月号でも少し書きました)。別の子どもは、「カチカチ山」の絵本で、転んでしまったおばあさんの挿絵に「痛いの痛いの飛んでいけ」と言いながら軟膏を塗っていました。

本来は熊やワニがしゃべるわけはないのですが、絵本の中でくまさんやワニさんがお話ししたりするのも、子どもたちはごく自然に受け入れていますよね。

いろいろなものに触れて、見て、聞いてじゅうぶん自己を表現するようになったあと、年長時期から就学後にかけて、他者理解が進んできます。兄弟姉妹や友だちとぶつかりあいながら、自分とは違う気持ちや考えに気づいていくようですね。そうすると、先のエピソードのようなことばは見られなくなって、次第に、自分の立ち位置や他者との折り合いや協調を考えていくようになります。

自由に自分を表現できる機会を持たなかった子どもは他者の表現の理解が進まないとも言われます。くすくすとこっそり笑ってしまうような楽しいエピソードを集めながら、子どもの成長を見ていきたいですね。